後藤十次郎（ごとうじゅうじろう）

堅実経営と節約の徹底を旨として

―「世界のマキタ」を基礎から築く―

後藤十次郎（1897 ～ 1978）
写真：（株）マキタ提供

■生立ちと創業からの関わり

後藤十次郎は1897（明治30）年に三重県桑名の農家の三男として生まれた。幼い頃からのんきで楽天家だったが、決めたことはやり遂げる辛抱強さを持ち合わせていた。

尋常小学校高等科を卒業と同時に、明治電気の名古屋分工場に入り、見習工として働く。1915年、この名古屋分工場は閉鎖され、牧田茂三郎が買取り、個人経営「牧田電機製作所」を起こす。現在の（株）マキタの創業である。工場主牧田茂三郎（23歳）と、後藤十次郎（18歳）と、小学校を出たばかりの小僧と40年配の職工の4人だけでの出発だった。

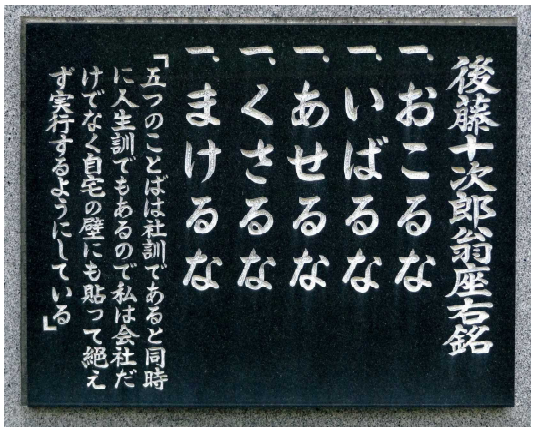
牧田モートルのカタログ　写真：（株）マキタ提供

後藤十次郎は独学で電気技術を身につけ、モーター、変圧器、開閉器などの修理にあたった。開所1か月後には明治電気の職人仲間が次々と入所し事業も発展の一途をたどる。1927年、営業分野に職種が変わり、岡崎支店の開設、割振販売制度の考案など成果をあげる。岡崎支店は、その後東亜電機として独立し、後藤十次郎44歳の時、この東亜電機の社長となり、牧田電機との縁がいったん切れる。一方、出身元の牧田電機は大戦前後、軍事産業への傾斜、空襲による工場焼失、経営不振、目まぐるしく社長の交代する困難な時代を経験することになる。

■牧田モートルから木工電動工具のトップメーカーへの転身

後藤十次郎は、1953年に取締役に、1955年に社長として牧田電機に復帰し、経営者としての力量を発揮する。1963年には完全無借金会社とし、以後、名古屋、東京、大阪各証券取引所市場第一部に上場する大企業となる。この間、創業以来、得意としてきたモートルから撤退し、電動工具専門メーカーを目指すという変革、社名変更が行われた。国内初の電気カンナ、電気ミゾキリなどの電動工具新機種販売はマキタならではの特徴である。1973年、75歳にて社長を婿養子の後藤修宏氏に引継ぎ、1978年に81歳で亡くなる。1991年、岡崎市名誉市民として顕彰された。

初代電気カンナ　写真：（株）マキタ提供



後藤十次郎の座右銘　写真：（株）マキタ提供

■後藤十次郎の遺訓「おいあくま」の威力

経営者は、従業員に対して納得のいくように諭し、いい聞かせればよい。従業員がお互いにおこったり、いばったりしていては、仕事はうまく運ばない。「おこるな　いばるな　あせるな　くさるな　まけるな」は堅実経営と節約の徹底を意図した社訓であるとともに後藤十次郎自身の人生訓でもある。後藤の胸像とこの遺訓は現在、本社正門から終日従業員を見守っている。

（藤田秀紀）